

3 神野の石造物 — 十三仏板碑・地蔵像庚申塔・二夜叉付き庚申塔 —

藤 由美

はじめに

神野の石造物については、『史談八千代』第45号と第46号で、土井昭雄家で新たに発見された中世の武蔵型板碑群と、ドウヤマ墓地の江戸初期の一石五輪塔について報告した。

本稿では、本年新発見の十三仏板碑および、『八千代の歴史』の「石造文化財」一覧表(*1)に記載された神野の石造物のうち、特に重要な庚申塔2基について改めて調査を行い新たな知見を得たので報告する。

1. 新発見の十三仏板碑

(1) 発見の経緯

2021年11月、当会の「ふるさとの歴史展」での特別展示「神野の板碑」をご覧になった神野の三橋一宏氏から自宅にも板碑らしきものがあるとの申し出があり、翌2022年3月16日、畠山会員と共に三橋家を訪問し調査を行った。写真撮影、拓本採取、法量計測などを行った結果、十三仏板碑の断碑と判明した。十三仏板碑については、八千代市では初めての発見である。

(2) 三橋家所蔵の十三仏板碑の概要

縦33cm・横28cm・厚さ4cm、緑泥片岩製の武蔵型板碑(断碑)で、上・下・右部を欠き、種子(しゅじ)が上段には2字、下段には3字(右端は右半分を欠く)が並んで彫られている。各種子は、線彫りの円形月輪内に薬研彫りされ、その下には蓮座が同じく薬研彫りされている。上部には主尊種子の蓮座一部と、左端上に月輪の一部が、下部にも月輪の一部が残る。紀年銘などの銘文はない。

種子は、上段左からキリーク(阿弥陀如来)・バン(大日如来)、下段はサク(勢至菩薩)・サ(観音菩薩)・バイ(薬師如来)の5字が判明できた。

写真1 神野の三橋家所蔵の十三仏板碑



2022. 3. 16 撮影

(3) 「十三仏」信仰と十三仏板碑について

人は死後、冥途で閻魔王などの十王の裁きを受けるという十王思想が中国から伝わり、

日本でも平安末期からその本地仏と共に信仰され、初七日から四十九日の7回と百か日忌・一周忌・三回忌の計十回の追善や逆修の法要が行われるようになった。

中世にはさらに七・十三・三十三回忌の本地仏が加えられて十三仏信仰が成立し、石造物でも十三仏の仏像やその種子が表現された「十三仏板碑」が造立された。

十三仏板碑の初現は永和4年(1378)銘の印西市吉高の羽黒十三仏堂の下総型板碑で、武蔵型板碑を含め、室町時代末まで広く普及した。

埼玉県での十三仏板碑については、中山正義氏⁶⁾により188基すべて武蔵型の十三仏板碑が集成されている(*2)。そのうち103基は嘉慶2年(1388)から天正6年(1578)までの紀年銘を有する板碑である。

千葉県では、川戸彰氏が紀年銘のある23基の十三仏板碑を集成されている(*3)。その内訳は下総型11基(香取市8基と印西市・成田市・横芝光町各1基)と武蔵型12基(流山市4基・関宿町3基と野田市・柏市・白井市・船橋市・千葉市各1基)である。

北総東部に分布する下総型の十三仏板碑が14世紀後半から15世紀前半に集中するのに対して、江戸川沿いの東葛地域に分布する武蔵型の十三仏板碑は、15世紀後半から16世紀後半までで、埼玉県で定型化された十三板碑の型式(タラク=虚空蔵菩薩を主尊にその下に12仏を3列4段に配置する)を踏襲している。

図1 神野の板碑拓本



図2 種子の配置復元案



(4) 神野の十三仏板碑の復元案

神野の十三仏板碑は種子5字のみが残る断碑であるが、本来どのように十三仏の種子が配置されていたのだろうか。

十三仏のうち、十二仏を3列4段構成で配置した船橋市八木ヶ谷長福寺の文亀4年(1504)銘の断碑の復元図(*4)と、完形の船橋市金杉町の弥勒2年(私年号で永正5年1508に相当)の写真および拓本(*5)、および関宿町元町吉祥寺の享禄3年(1530)の記録(*3)を比較検討してみた。

神野の板碑が主尊の直下にバンを置いている点に注目すると、5つの種子の配列が一致しているのは関宿町の板碑で、これを参考に図2のような十三仏種子の配置復元案を作成してみた。

なお、主尊タラークの右のやや上に日月輪が施されている痕跡が認められることから、この板碑の元の大きさは横が約32cm、縦は90cm以上あったと思われる。

造立時期は十三仏の配列や蓮座の形状から天文年間(1532~55)と推定(*6)される。

2. 八千代市内唯一の地藏像の延宝2年銘庚申塔

(1) 蓮座の人名を読む

神野の玉蔵院の上、熊野神社右の曲輪状の中腹には、小さな薬師堂があり、その左右に江戸時代初期からの古い石塔が立ち並んでいる。

左側は伊原家と在原家、右側が安藤家の石塔墓地(参り墓)で、その墓塔群には、如意輪観音像十九夜塔が3基、講による造立と推定される阿弥陀像塔と地藏像塔が混在している。

中でも穏やかなお顔で彫りも見事な延宝2年(1674)銘の地藏菩薩像塔は、安藤佐五右衛門家が維持管理してきた右側の石塔群列の中央に石塔群の本尊のように安置されている。

像は、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ延命地藏像で、「奉新造立庚申待為供養 石佛地藏一躰二世安楽所」(「庚」は異体字)の銘がある。






庚申塔として八千代市内で3番目に古く、さらに青面金剛像が庚申塔の主尊として定番になる以前の地藏菩薩像庚申塔として、市内唯一の貴重な庚申塔である。

写真2



延宝2年(1674)銘 地藏菩薩像庚申塔
2020.2.22 撮影

表1 延宝2年(1674)銘 地藏菩薩像庚申塔 調査記録票

調査 No. 1 (「市史」一覽表)	種類: 庚申塔	所在地: 神野 旧薬師堂
造立年月日: 延宝2・4・12	像容: 宝珠・錫杖をもつ延命地藏菩薩坐像	
西暦: 1674年	法量: 105×57×30 cm	形状: 光背型
	<p style="text-align: center;">(種子力) (地藏菩薩坐像)</p> <p style="text-align: center;">石佛地藏一鉢二世安樂所 于時延宝二^甲刀天道正 奉新造立庚申待為供養</p> <p style="text-align: center;">開眼沙門千手院 四月十二日神野村</p> <p style="text-align: center;">別當玉蔵院本願 戸井新右衛門 福田五良左衛門</p>	
		<p style="text-align: center;">飯嶋加右衛門 小兵衛</p> <p style="text-align: center;">源兵衛 四良左衛門 又右衛門 籾右衛門</p>
		

2022年4月4日、この地蔵像塔について安藤家の当主の正昭様から、像の下部蓮弁に「安藤」などの人名があるとのこと教示があった。『市史』の一覧表に記載のない銘文と
思い、4月7日に、畠山・菅原・小林・松柴会員と改めて丁寧な調査を行ったところ、
石塔の一番下の蓮座部分の土を除き、よく洗って拓本を採ると、11人の人名が現れた。

(2) 造立に関わった14名の名前

調査の結果、右側蓮弁の銘文は「治右衛門／安藤三良兵衛／八右衛門」、中央蓮弁「飯
嶋加右衛門／小兵衛／源兵衛／四良右エ門／又右衛門／藤右衛門」、左側蓮弁「崑兵衛／
治良左衛門」で、この名のほか、上部の像の左わきに「戸井（「土井」の間違いか？）新
右衛門／福田五良左衛門」、右わきに「道正」の銘があり、総計14人の名が判明した。

このうち、三郎兵衛・四郎左衛門の名は、宝永4年「神野村畑方水帳」(*7)にあり、
新右衛門・八右衛門・源兵衛・四郎左衛門・又右衛門の名は明治6年の「神野村戸籍帳」
(*8)まで継承されている。なお、「安藤三良兵衛」は、この石塔を伝承してきた安藤佐
五右衛門家の祖先と推定される。当時、ムラと主だったイエの総力を挙げての造立だっ
たのであろう。また、「飯嶋加右衛門」については、飯島姓は神野村には存在しないので、
どういう関りなのかは不明である。

(3) 神野と先崎の地蔵像庚申塔

この延宝2年の庚申塔は、八千代市内
432基の庚申塔のうち唯一、地蔵像の庚
申塔である。

中世末から江戸初期の庚申講は念仏
講と不可分であり、庚申塔の本尊に様々
な如来像や菩薩像を刻むことがあるが、
その数は少ない。

例としては、東京都江戸川区に北小岩
の万治元年銘塔から小岩の寛文10年銘
塔まで5基(*9)、白井市八幡神社前庚
申塚の貞享4年銘塔(*10)などがある
が、神野の地蔵像庚申塔と最も深く関係
するのは、佐倉市の先崎地蔵尊である。

先崎地蔵尊本尊の石造地蔵菩薩坐像
は、胸元で合掌する高さ89cmの美しい
彫像で、背面に「奉造立庚申人数廿五人
／先崎村／本願友野河内／慶安三天

写真3



慶安3年(1650)銘
佐倉市先崎の地蔵像庚申塔

2018.6.10 筆者撮影

(1650) 庚寅二月廿四日」の銘をもつことから、佐倉市最古の庚申塔とされる。子育て地蔵として今も広く信仰され、佐倉市の有形文化財に指定されている。

印旛沼の南端に面する先崎と神野は地理的に近いだけでなく、保品・下高野を通過して八千代市西北部から佐倉城下へ抜ける古道でむすばれていた。この先崎地蔵尊の功徳の名声が神野にもおよび、地蔵像庚申塔の造立の背景になったのであろう。

3. 神野十字路の南台崖際の享保 14 年銘二夜叉付き庚申塔

(1) 「幻」の庚申塔を探して

神野の全石造物について現地確認を行っていて、どうしても見つからない庚申塔が 1 基あった。

『市史』(*1) の「石造文化財」一覧表の「一庚申塔」の欄の「40」番で、「神野字南台／享保 14・9・吉／青面金剛／光背型／奉造立青面金剛 神野村／(人名多数)」とある石塔である。

字境堀など三つの小字が接する神野旧道十字路付近と推定して探索してみたが、ここには、字境堀側に①寛政 7 年銘と②慶應 3 年銘の文字庚申塔、字南台側に③元文 2 年銘青面金剛像庚申塔 (写真 4) の 3 基が路傍の角にあったが、字南台側にあるはずの④享保 14 年銘の庚申塔だけは、近年見たという人もなく、探せなかった。

図 3 神野十字路の 4 基の庚申塔の配置



- ①字境堀の寛政 7 年銘 青面金剛銘文字庚申塔
- ②字境堀の慶應 3 年銘 庚申塔銘文字庚申塔
- ④今回探していた字南台の享保 14 年銘の庚申塔

写真 4



- ③字南台の元文 2 年銘
合掌型青面金剛像庚申塔
2020. 2. 22 撮影

この神野十字路に関する情報を調べてみると、『八千代の道しるべ』（*11）の「もう一つのさくら道」の道の案内記に、「辻の周辺には青面金剛像や馬頭観音が多数安置されていて、今も変わらぬ古い集落の入口の表情である。左側の青面金剛像は、道より2mも高い木の根元にあるが、元来その高さに道があったものを掘り下げたのであろうか。」と書かれていた。

たぶん「道より2mも高い木の根元」の青面金剛像が、見逃していたこの庚申塔かもしれないと推定し、2022年7月1日に一人で現地に向かった。道の反対側の道祖神社から目を凝らして「木の根元」をみると、石塔らしきものが認められたが、崖際の木に引っ掛かっているような危険な場所であったので、後日、複数的人数で調査を行うこととした。

7月5日、畠山会員・小林会員・松柴会員に調査にご協力をいただき、少し西側の脇から藪こぎして崖際にたどり着く。崖角の杉の木まで行きつくと、木の根元に石塔が挟まって浮いている状態で足場はほとんどなく、一人以上は近づくことはできない。交代で確認にいき、落ち葉や小枝を払ってみると、実に素晴らしい庚申塔が現れた。

（2）二鶏・二夜叉付きのユニークな像容の庚申塔

さっそく、計測・写真撮影を行い、「奉新造立青面金剛／享保十四己酉星九月吉日／神野村」の銘文を確認した。台座部分には、多数人名が刻まれていてこの人名判読のため、台座の拓本を採った。

主尊の青面金剛像の像容は剣持型ショケラ持ちの六臂像で、均整がとれた良い像である。駒型の上部輪郭に沿って種子からに向かって日月に延びる雲の造形も良い。

うずくまった邪鬼の下の三猿は正面向きで、右から不見・不言・不聞で、ダイヤ型で一列に並ぶ。

本体と一体の台座部分は中央下部を欠くが、中央が重なった円形光背を浅く彫った中に、向かい合わせの二羽の鶏が繊細な像容で浮彫りされている。その両脇には右に6名、

写真5



崖際の樹上の④の庚申塔（楕円内）

2022.7.5撮影

左に7名の人名が彫られている。

さらに、青面金剛像左右下には、珍しい二夜叉が浮彫りされている。

庚申講の掛軸に表現される青面金剛王六臂像には、二邪鬼・三猿・二鶏のほか、儀規（『陀羅尼集経・第九』）により眷属として二童子と四護法善神の四夜叉（菓叉）が描かれる。ただし石塔では、二童子・四夜叉の造形は極めて少ない。

写真6 享保14年庚申塔と二夜叉・二鶏



二夜叉



二鶏



表2 享保14年銘青面金剛像庚申塔 調査記録票

調査 No. 40 (「市史」一覧表)	種類：庚申塔	所在地：神野 字南台
造立年月日：享保14・9・吉	像容：青面金剛・二夜叉・邪鬼・三猿・二鶏・日月	
西暦：1729	形状：駒型	法量：100×46×18cm
台座部分銘文		
		
久五□長□権長 □□兵四□十□四七 □□衛郎□郎□郎□郎衛 (二鶏)		快□□午助 元□兵太之 衛□郎助丞 弥七□ 神野村
		(目) 享保十四 己 酉星九月吉日 (夜叉) (種子バク)(六臂青面金剛像)(邪鬼)(三猿)(二鶏) (月) 奉新造立青面金剛 (夜叉)

二童子・四夜叉付きの青面金剛像庚申塔の事例としては、浦安市堀江宝城院の元文元年(1736)庚申塔(*12)や江戸川区東葛西真蔵院の元禄11年(1698)庚申塔(*9)があり、市や区の文化財に指定されている。

近隣では、印西市大森の長楽寺にある正徳5年(1715)銘の庚申塔(*13)が有名である。

この四夜叉は、両端の夜叉が大きく金剛力士像に似て表現されているので、「二夜叉・二仁王」ともいわれる。

また、八千代市勝田梵天塚の延宝2年(1675)銘庚申塔には、二童子が付くが、夜叉は付かない。

今回調査した神野十字路の享保14年塔は小さな二夜叉付きで、右の夜叉は、生前の罪

写真7



印西市大森長楽寺の
正徳5年(1715)銘の庚申塔

2004.12.30 撮影

状を紙に書き記しているのであろうか、左は「鬼の金棒」を持っているようなユーモラスな姿で、他に例が見当たらない。

(3) 今後の課題

当庚申塔は、神野十字路の崖際に、宙に浮いているような状況下にあり、地震や強風で路上に転落、または樹ごと倒壊する恐れもある。早急に安全な場所に保存されることを期待したい。

おわりに

今回は、神野での新発見の十三仏板碑と、石造物として貴重な延宝2年銘地藏像庚申塔と享保14年銘二夜叉付き庚申塔の調査の記録を報告し、考察を付した。

神野には、ムラの歴史と民俗を伝える石造物が多数残っており、また新たな造立も続いている。日々、新しい発見もあり、今後も石造物調査を通して、地域の方々と神野の歴史・民俗の探求を共有していきたいと思う。

最後に、十三仏板碑の調査にご協力いただいた神野の三橋一宏氏、この板碑の種子と年代についてご教授いただいた石造物研究家の野口達郎氏、延宝2年銘地藏像庚申塔の人名銘文についてご教授いただいた神野の安藤正昭氏に厚く御礼申し上げます。

*注

1. 「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代・現代Ⅲ 石造文化財』八千代市史編さん委員会 2006年
2. 中山正義「埼玉県十三仏板碑集成」『石塔・石仏部会誌』5号 史迹美術同攷会東京 1996年
3. 川戸彰「千葉県十三仏板碑」『野中徹先生還暦記念論集』 1993年
4. 『鎌ヶ谷の板碑』鎌ヶ谷市郷土資料館 2002年
5. 『板碑』船橋市郷土資料館 1979年
6. 野口達郎氏のご教示による
7. 『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅰ』八千代市史編さん委員会 1989年
8. 『八千代市の歴史 資料編 近代・現代Ⅰ』八千代市史編さん委員会 1988年
9. 『江戸川区の文化財』江戸川区教育委員会 1994年
10. 『白井町石造物調査報告書-第一集-』白井町教育委員会 1986年
11. 『ふるさと発見 八千代の道しるべ』八千代市郷土歴史研究会 2001年
12. 千葉県 HP > 浦安市の県指定文化財> 宝城院庚申塔
<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/bunkazai/bunkazai/p111-018.html>
13. 『印西町石造物 第七集 大森地区調査報告書』印西町教育委員会 1990年